

# 松蔭浩之



まつかげ・ひろゆき：アーティスト。  
1965年福岡生まれ。88年大阪芸術大学卒業。個展を中心に国内外で活動。写真、グラフィックデザイン、ライターなど幅広く手掛け、アート集団「昭和40年会」、宇治野宗輝とのロック・デュオ「ゴージャラス」での音楽活動でも知られる。



ELLIE MY LOVE ---- Hiroyuki Matsukage 2002

「写真を撮る」時とはどういう時だろうか。  
証明写真、記念写真、旅の記録、また新聞や雑誌のゴシップ記事にグラビアアイドルの特写などさまざまな写真(映像)が氾濫する現代。写真家やカメラマンを生業にするスペシャリストでなくとも、フィルム/デジタルを問わず、いまだ一度もカメラを手にしたことがないという人は少ない。また日常生活を営むうえで「写真ってなんだろう?」とか、「なぜ写真を撮るのか」とかいったこむずかしいことを考える人はほとんどいないだろう。それほど現代は「映像とともにある」時代であり、写真は我々の生活や文化に「あって当たり前なもの」として認知されているメディアなのだ。今回はただか200年の歴史しか持たないこの「写真」へのオレなりの考察を紹介して、半年にわたって続けたこの連載を締めくくることにしよう。

高校を卒業する手前まで油絵を描いていたオレが写真に移行したのは、「美術史における絵画と写真の相関関係」への興味と「絵画には無い即時性」の快感……シャッターを押すだけで画ができてあがる潔さが、せっかちでコツコツと習いごとをすることが苦手なオレにピッタリだったからだ。画材さえあれば頭に浮かんだイメージをどこでも描ける画家にくらべ、写真家は対象となる物(被写体)がなければ何も表せないから不便だし、その忠実な描写性が現実的すぎて馴染めないし絵画至上主義の人は言う。たしかに想像上の産物を描出することも素敵だが、美人が画面上に必要なならば違いにいしくがなく、ピラミッドを撮りたければエジプトまで飛んでいくしかすべがないという写真のジレンマ(在るものしか撮れない。だからどんなに頑張ったってモンローやバーミヤンの遺跡を撮影することは誰にもできない。無いものは撮れない!)こそ、オレは逆に「能動的だしストックでシャレている」と考える。

「画家は構築し、写真家は暴露する」とは、写真考察の分野において古典的教科書とも賞賛すべきエッセイ集『写真論』(晶文社刊)を著したスーザン・ソングの定義。ここで暴露されるのはスキャンダラスなまでにリアルに表れる形や色を指すのみならず、実はそれ以上に、撮影者の物の見方や捉え方こそがあらわになるという考えだ。その(レンズ越しに覗くという行為から)ある種の覗き趣味的な構造も含め、写真とは作者の嗜好や品格、フェチを残酷なまでにあばき出して定着させる装置なのであ

る。巧妙な3DCGやアイコンなどの合成は別として、人は写真に写っている人や物、風景を「本物」として疑わない。そして、「これがあなたの美しい、面白いと思うものなのですね」と理解すると同時に作者の「愛」を知ることになる。その愛が普遍的で大胆で新鮮に思えるとき、それは「良い写真だ」ということになる。まさに写真とは即時性や記録性、リアリティーという特性以上に、人間の心理の奥底に居座っているセンチメンタリズムを助長するものなのだ。被写体である「それ」が、「かつてそこに在った」ということ、さらに撮影者である「私」が、「そこにいた」という幻のようなあかし。それこそが写真の本質である。「プリクラ」などはまさに、実存の果ての感傷……それがいつかはなくなってしまう「命短し恋せよ乙女」という感覚を刺激して大ヒットしたのだ。さらに、そこに写ったものは現実で在ったものでありながら、決して触れることができないというのも、写真が我々に「胸キュン効果」を発生させる力なのだ。「写真がうまくなるコツ」は、光と影のバランスをコントロールするという技術以上に、歓びも悲しみも乗り越え、酸いも甘いもかみわけて世界を見据えることだろう。それは老いてますます盛んな巨匠・篠山紀信の仕事を見れば一目瞭然、「写真には撮影者のスケールが反映される」ということがひしひしと伝わってくる。オレ自身、年齢を重ね、経験を増すうちにレベルアップしていることに自分でも驚くことがある。「年とってよかった」と実感するために写真を撮るのもいいんじゃない?!

最後に、写真にまつわる興味深いテキストを2冊ほど推薦しておこう。ロラン・バルトの遺著『明るい部屋～写真についての覚え書き』(みすず書房刊)、亡くなった母親の写真を整るうち、少女時代の姿を発見したことから始まる写真への哲学的瞑想とも言える知的な自叙伝は、優れた私小説としても堪能できる名著だ。続いて、「私は絵に描きたくないものを写真に撮り、写真に撮れないものを絵に描く」と言い放ったラジカルな芸術家マン・レイの自伝『セルフポートレート』(美術公論社刊)、オレに進むべき道を示唆した男の、ユーモラスで痛快なナルシズムの放出ぶりにはまだまだ学ぶべきものがある。では諸君、いつかまた! オレの座右の銘、ゲンスブールの言葉でお別れだ。

『美しくあれ、そして黙れ』



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)